

安位寺殿御自記 十六

内閣文庫	
番號	和 20909
冊數	82 ( 16 )
函號	古 19 359

書文古  
一九幽共入三  
三五九號





二二九  
共八十一



16  
2

文安六年丁卯元月小



安  
抄

經  
卷

文安五年丁酉月  
三

要鈔

種子

16  
4

宋立和林之以純酒齋  
松雪子題

ト山の極一派者、源平の源氏の所持者也。

おおきな手紙をもとめに、  
ゆくゆくはト官門を、やがて秋の夕

御出事代々有天皇御子也  
古事記傳大也

文  
卷二年  
丁巳月小

日中之餘  
方宿也  
方宿也  
方宿也

同人以爲子雲之賦全財済而其事未竟  
嘗與子雲不期而合此皆子雲之子也

長治主書  
伯信作孟冲母  
白藏主書

水也。故爲絕之。下  
次小限。第子行。子  
方上。其陽

行草。安和。一書。

卷之三

卷之三

清流院行不外  
其聲玄妙在枯木

卷之三

蓮喜院 有松院  
本居宣長 有松院  
法華院 有松院  
祐元院 有松院

而  
之  
行  
仿  
種  
曰  
既  
使  
作  
形  
之  
而  
行  
覽  
之  
不  
知  
因  
以  
生  
之  
而  
不  
一  
而  
不  
少  
也  
主  
事  
之

二日十七宿

年期也固也。湯革子同門也。ノ也  
おこ一朝上相給て、而て里中狂矣。

一  
西  
卷

洪武書

卷之三

向田惠介  
涉水而過

卷之三

主事者に之を以て  
湯屋より出でし男の事

て向丁印

リジカニミテ第ナ行けこ前ニシニヒ等  
行清水は霧潤也志の丘地  
魚湯ニヤシトの湯校也人徳等所  
シテ西下山田有ノ湯也ナノ入湯

名木屋  
名木屋

官已ニ  
主君と金を筒ニ取一派も猶せれ  
妻あ上を取一派も是もすく争ひ難  
りゆる事多しめの事可ヒに詠詩多  
礼育ちぬく毛利退ひ

一  
院庄作美極取口送而至新毛

毛利

七日庚午

ガ湯わぬ

三日庚午

ガ湯わぬ

生吉信種

ノ

信政元年

ノ

ノ  
日本本  
にま竹子を詰り候う

三月二十九日かと申す年下あれ  
よ附えむる事

常重事多極一取事多事多事多  
事作れり極一努乞達シモ四役本  
事作れり極一努乞達シモ四役本  
事作れり極一努乞達シモ四役本

當重事多極一取事多事多事多

古事記傳

事作れり極一努乞達シモ四役本  
事作れり極一努乞達シモ四役本  
事作れり極一努乞達シモ四役本

一 帰行節事多極一取事多事多事多  
事作れり極一努乞達シモ四役本  
事作れり極一努乞達シモ四役本  
事作れり極一努乞達シモ四役本  
事作れり極一努乞達シモ四役本

一 帰行節事多極一取事多事多事多  
事作れり極一努乞達シモ四役本  
事作れり極一努乞達シモ四役本  
事作れり極一努乞達シモ四役本

二郎山中行方不可とすとて而まく歎え

一トもあらず上の方桓一は傳罪が極修く  
也

向し家

かじ出れり。幸大玉院天王寺有え  
かの事令天子千友。内御事全村火之三毛  
の御事三毛をよ二毛と呼ぶ  
がよりササ再び御中納得御事おゆき住美  
市がゆかす不全村事。千金防内  
御事出止し御内事。千金防内  
御事あり。かま仕事。千金防内

今モニ見て御内事  
御事。千金防内事。と

も。さし正使事。おまり。お御事。御事  
とる。とどく。  
自與御事。御事。と  
一風後一而陽作。一御利。御清美。御作  
一御利。御清美。御作。御作。御作。御作。  
一御利。御清美。御作。御作。御作。御作。  
一御利。御清美。御作。御作。御作。御作。  
一御利。御清美。御作。御作。御作。御作。

16  
9

十一月廿日  
也陽寺中

一土而生火多反覆有說言是甚。以寒多矣。

一赤乃有蒸氣也。此亦常事。

一赤而寫り。もと赤。ゆう極度之上佛。

一仰山中。極度之。

一島已極二荷

三事二物

一本海極二事。極度

一黑極度。事。極度

一白而黑。又一極度。事。極度

一白而黑。又一極度。事。極度

一黑極度。事。極度

一青而赤。事。極度

一白而黑。事。極度

16, 17

生可而  
三事不  
以至也

生有中才

而見之反之過而得之者也

(ア) やマサウルス  
モロコシノ  
ヤマサウルス

也。金行而一寧，不以爲尚矣。

一  
而上傳醫術。而其子孫亦多有傳者。  
一朝奇一風也。方之有之。

アラカルト  
モルタルのモルタル  
モルタル

の事に早と同様あらゆる事に心をもつておられたのである。

烏鵲以東方爲遼東向遼西而行至遼西

卷之三

其間已て高  
橋日田に正月に之より拂の日をも其の後す五行  
御方蘇原國東は元四家而甚ぞと申仰  
せりと此後移幕を再び其移入仰再び高  
橋事より又青子品既以品用也かえ  
るを、又人泥の布地に絶因  
一高橋ト仰

一高橋市下に河内大師寺に通じて新井庄  
み逃亡於中寺力臣み主重國政を  
一高橋院に地成院事より以て之を以て  
高橋院(3)にて上を多め古事記  
より下へゆる地成院事より作令を  
物事と云ひて度に其役

老口産医  
早朝より近江守と高麗守金元之宣  
月修之三郎左衛門  
一八中大友トニテ努力其利根守に附方め  
種(ちゆゑ)

其前  
皆三子猶も早朝に付を免  
其家久の又付て之を免る所無く免る  
上二郎も免る  
皆あ院領一町を云ひ御子に代り  
高橋元則(伊藤西園)より免る事無く  
其初免記に於て之の事免る事無く

御内へもの三日もあらわむ

12  
16,  
13

九月三日

卷之二

事事安良一  
一句角同二天全符行前少無通念大  
事事不動方りスのを吊してト申す故也  
云事ゆきおせま事かへ給候極ぬ様にて  
事事取てシル由ヤ名の事也  
事事下宿え  
事事うらゆる事事  
事事うらゆる事事  
事事うらゆる事事

16  
14

卷之三

そ因爲か人云ひての事と申すが如きは力不足なる  
事半端も一物もしくりこゆるも

よりおまかせとお假名を傳ゆ人より  
の本を詮する所と

西村  
事あはてんゆえにあらゆる  
思ひのうへり

之を爲す用事有ゆる所ありて是れに  
則りトシテ又其色の如き清々其外子  
文朝也云國事中止と謂ひ少く之  
より以て是れに於て是れに於て是れ

卷之三

三月以來雨氣甚有

太宰近在門一毛一柳  
太中書郎不以二師而至而聞其聲  
留司事紙乞之而有事不許  
某の所向一毛一柳已得之  
吉日吉時持書館行之其毛毛ト  
申報事アシテ事到終

巴蜀西中

15

某大書も未だ手に取らん。近頃は移居準備で忙  
と主一子の事務を手当する。又内閣にて相談し、又往  
わらつて内閣にて。又内閣にて。又内閣にて。又内閣にて。  
以てある事務を手當する。又内閣にて。

一  
五  
一  
一  
一  
上九帝  
九五  
九二  
九三

官也。向  
おもす方言は下べんせきと云ふの傳へて  
じと血江源一  
十本山源也。以下皆中源也。や和元極  
多源。子生之多一而  
水之多也。又水也。

卷之三

一ノアリと立派也。とテ蓋家事。頃  
出も。松浦先生。佐々木義行。一松浦先生也。  
下り。石見守。山本。山本。山本。山本。山本。  
也。山本。山本。山本。山本。山本。山本。

七日已亥  
伍叔馬歸  
而之鄉  
亦有子也  
此之盡  
之能

一言第トハナニ通爾アラアシムニ古事記  
一傳子快乃脣不折也トテアシムニ古事記  
一五山院ノ通アリ難極モトニシテ多事アリ  
一トセトニ古事記也トテアシムニ古事記  
一女神院本ノ通アリ極モトニシテ多事アリ  
一トセトニシテアシムニ古事記也トテアシムニ古事記

## 八日度子

ト人耶都ヒニ留ル也

ニ傳丸ノ五帝ノ之子也多

九月子也五性無

也六下

丘

丘根也三枝也此丘也作也

丘根也

也枝也

也根也

丘根也

也枝也

也根也

古事記

也枝也

也根也

ト傳丸

也枝也

也根也

耶都也

也枝也

也根也

古事記

也枝也

也根也

土日五節書  
ク角國下前  
一 ひる百里をとて内移本からうつ西  
又も亦はとうせん人わモ  
一本内諸事並病す零をす而もんが是  
ねとて吾令和即今人よりリヤヌルキトギ  
ソモれそ此より多くありと金行多  
立すりもリモ有りけりとくま  
上治めぬ紅而ゆき前ニミナニ而也  
れ。木立しけれり而母子ア雨寒等  
佐。上三手枕て仰けり4.より竹  
主牛士モアリトシト下也見えと  
や。往來の在じゆ前心とより上野  
はこみ手ひびに中と方否ア  
ル上原り、車善移院中と市内浦  
久り上野はれあそみひるのあそ  
す。猪下。猪もとあは野猪ともと  
モ出。鳴動もあ野猪もとあれ  
めえます。よろ異の佐野猪  
トナリ  
一 東まで北流下下十日半の間もと  
住居向高麗とまく。二月後もとまく  
南。一月後也。西房山國もと間河  
都。三代。竹林移院と生

あき師内賀にしゆ候おほひ

十一  
青霞集

御上風と御内之の商事二工竹作三

卷之三

毛利元就の死後、毛利家は一時崩壊の危機に陥る。しかし、元就の子孫である毛利秀吉が、その才能と手腕で再興を図り、ついでに豊臣秀吉となり、日本の統一大業を実現する。この間に、毛利元就の死後も、毛利家の存続と発展が図られる。

吉日酉年  
と湯乃口國

卷之三

卷之二

上古自丁未之歲  
至西陽為之而次之興  
是亦以次之而次之也

是事無不以爲之也。此其所以爲之也。故曰：「人情有所不能忍者，匹夫見辱，挺身而鬥，此不足為勇也。天下有大勇者，卒然臨之而不驚，無故加之而不怒。此其所挾持甚大，其志甚远也。故曰：「大勇無怒，大智無憂。」

古音字典

上段見之又云曰  
而此亦非事上事  
之主也。力學之實  
之主也。

坐候する所心を以て候。其の事に  
あらめは院筋中脚印の上に置かれて  
御車を出でる。

陽だら三跡

右車下店に置かれてあると仰り  
るが跡は一ノ段も高はて左移すを  
之を覗かむ。

七月二日

上候見候が御正幸典がおひたてをきく

大同殿

右方面下

御車下店をうなぎに連れておまき

多知音

と歸る次第に主事不居

多知音

西より又アトテ四字圓滿十士の如

也

也而池東西と相手

也而池東西と相手

五日未申刻而一ノ布下

ちづるも即ち彦久須美而事との布見う  
あゆくとも二十九日未申刻三井ふうトセ仰下  
室に付申る。

一ノ房多々信頼わゆり更てお力私祝奉

吉陽而してお布下テ

長年心に記しめり也

筆者中野と再書之  
おあじと初書あり月の内も即ちに落成

重法は下りて有り難い事也  
行年既経告り多しゆと云ふ事を度而う

西より吹又の野が前所もれ

廿日壬子

在院と申す

一係と申す御前御内院と申す事也  
御書事多々承候事多々

彦馬近興テ此昇入

廿四

宣和も病氣方付少南甲叶、彦馬也、ニモ  
仰けられよ。富山及義高セテヒヨモ

之里不仕。かく仕立せり。トモシ方

る事やカタリ。まことに高弟写手ナシ申

ス高ナシ。

十一  
趙高主事丸極三荷傳焉様手足限布十地

止こやまく申す事也。わざわざ

白浪全討付土之前

れ大國乃ど。は花紋不連

レ行私性師。事而向之物海正院も。也

高少行上事。但是而と申す

松毛行徳。是そ果たる事も

サ向里風

一  
其と申す事也。是以至多西ろ

相易ひく。多行アシキ申す事也。歐洋之風

佩も。改服附。ナリ。行難也。申ゆど。以も

ね訛。ナリ。ナリ。申す事也。

三井高尾

せうじ和  
やゆれ等と高まらる

上高はもとより伊勢に打と連れこ  
宿泊の事無く毎日中也だされ  
ゆき紳士の如きとめに

三郎 信物をあく  
と高ち遊部ヒヤアラシキ

常連と三郎 う生モ いせにてておテ  
ゆかに御けり ゆきとひやくの物生すよ  
町の高麗石鳥居ともて深江高麗  
ニありと詠と歌しや もに

### 西日高辰

地蔵がめくみ難波院とくが世終度  
と

首丁已りて而  
地蔵向三郎かゆけり

と湯ゆく  
也已中院通と高麗一花

東里家  
ゆめスヌヌ桂圓金莖工方多那と夫酒屋  
ひなすを酒

其の日中  
かゆき移北山の事  
事中は多那の言

16  
22

2

少壯  
當人世之時也  
苟失其時也  
則雖有過人之才  
亦將無所用矣

日月  
是皆天子也而天子之氣也動天子也  
死乃也天子也  
世之俗りの事一も思ふも  
事一か政と一風  
一久下す庄中  
游也行とせる

在學ノ事  
候也。其事もとが前業者  
廣く考へて、何事か思ひて、ちと地  
圖にて、小

皇方子少卿  
一匁海門三窟全歸近來  
一布勸乞於九天而入于萬之次  
一角不移之子長安以下  
水山之血矣

一 善事伏坐け身外生る。いづ  
自下ト高シヒ止ゆも山室。あはれにシ尚

脅へも毒烟多氣。病葉異科。自室内へと雨期  
移れ三人初也。そ

一 がんがあ耶。

一 有事中は井

トシテ御移まほ後。み跡草。先行もと。  
病室也。ゆが下す。

一 と湯のうしよ入浴者もこの極至是也。

一 窓心本意也。ありて此ぞ

胃心腹也。

一 ある割也。見要義め。移病參。身處也。内侍  
長身也。江戸。又も土而行次。家。あはれ也。三院

一 事也。お院。も歎う。相力病。

一 し。身は良。松原。ゆき。身焉も。遠。松原。大和

一 食事も。ト。身。の。旅。そ。石は。

一 ある身。まつた。宿也。何んと。立元。こ。身をと

一 有事。御前。御馬也。と。身。夏ト

一 玉湯のう。

一 ある身。も。鶴下洞。と。身。玉湯。や。身。も。

一 三郎。つ。身。か。と。身。け。も。

16  
24

三

一  
丁巳年夏月  
王世貞書

高麗國

松毛が三野へ出でて相模をかわす  
一  
久の南山淨土院詔書と曰ふあはれ興奮の言葉  
瓶やうき其のあはれアラカナシトニカニテ  
玉毛し三毛あもアラカニトニカニテ

七月己巳  
とすは下  
高行  
ひく  
りて  
や下  
あり  
れ  
カ  
の  
れ  
る  
一  
り  
ま  
れ  
は  
よ  
う  
す  
る  
一

白居易集

日暮千尋  
萬葉西風了無依舊  
三里之水也  
初發中百萬人  
到浦口之船也  
都未曉何不早作  
計而及早為之也  
是矣但二笑不可  
忘草而食也

九日  
高行健と見附り、又西行の事  
一書手本は書下し、高行健と見附り、又西行の事  
之を書下し、高行健と見附り、又西行の事  
之を書下し、高行健と見附り、又西行の事  
之を書下し、高行健と見附り、又西行の事

江邊爲浦御行世臣歸

とあ印

三國志傳第尾徳是之のれ一は傳  
やうの白波事も附高軍士もも  
のを詣まよ。由東補上。補折。も  
折。出事。ゆかせ。而後其年  
又。お。内。也。也。そ。と。と。と。と。  
水馬貢。入。そ。そ。又。又。又。又。  
一。道。行。也。下。水。馬。是。江。手。と。と。

田代。也。也。也。

古事記。鳥居  
佐佐木郭也。也。

一。松元丸。卯。ア。ス。セ。セ。セ。  
二。と。湯。ア。ア。ア。ア。ア。ア。  
福。方。エ。宝。要。事。極。取。徳。新。才。一。頭。  
月。色。重。追。し。し。す。而。有。不。移。索。才。在。  
一。猪。食。二。市。油。三。下。床。方。日。彦。多。不。  
多。事。越。往。清。ト。カ。待。ス。テ。新。又。ミ。  
食。也。仰。見。あ。う。衣。て。ま。あ。り。也。ト。  
四。以。ノ。參。主。也。カ。ト。多。い。サ。ム。而。わ。也。也。  
五。と。テ。巾。ト。人。多。往。徳。方。ロ。ソ。モ。深。  
西。行。そ。ト。書。出。  
竹。活。不。ト。也。也。

土。同。而。也。

匂通同之方を切ひて病  
一物うそりと並行せ形

土同年中薬  
新玉全麺 陰清 鱗身身 極一吸も  
物本日達而か行能所 付多取也往  
多テ作多キ有事内可全一法らモ  
子有在る木力モ久シテアカ  
事多喜ニえ宣傳能り見立ヒシテ四万  
元取行キモ  
其回向也五手三

吉也あ卉

病氣近遠ハ一族長澤  
半身の病内行運力而也行了  
其音頭行本主トアガレ拔利  
乃別大至主ニテ落院ヤスツ加瀧之而自立  
行之今後シドリ也因也事シテ其則而スミ  
四被書半身氣中シテ候ハシウノ命利モ貢  
主ある事シメ及前く行能所  
作主て  
ねわ行氣本主舉火如代シ而有御用  
而有而十面  
其上落所トアガレ追坂  
行宿者ト下ト瀧萬主ト  
服主トアガトシ行能精神主シ相稱喫  
寛え向主トシテ候也而有社りト相能主  
リトナシテ其事而相能也ト相能



16  
28

七

あらうとあらうと  
おもひだす 沈み三郎  
おおきにあらうと  
おもひだす おおきにあらうと  
おもひだす

太白店辰戌酉酉

一柳原は室とサヌキを付與す。

長江より水を乞ふと人を貰ひ  
おひき山ありひりもとむすび地  
やまね松自立と角をもて御納地  
九日壬午也

ま移西行也。やを多々、志向あり。而て、而  
り、モ内社、贝く玉輦下、あれ。あらも、三年、あ  
と、而、カ、度、氣、向、と、度、後、也。わ程、  
れ、シ、ニ、病、ふ、高、リ、ヒル。わ、内、セ、ハ、成、女、キ、ヤ  
フリ、シ、丁、隣、モ、リ、用、わ、而、贝、く、ミ、以、而  
、而、リ、ア、ル。ア、キ、リ、移、リ、モ、リ、モ、モ、  
久、ミ、シ、ム、ア、代、也、サ  
一、南、郊、ヨ、ウ、ハ、メ、ケ、ル。七、青、月、未、全、ト、要、歸、行  
リ、カ、セ、行、リ、メ、ア、堅、モ、ト、シ、紀、行、リ、

16  
29

也こそ大佛傍より出れたりと申すか而  
其後此成吉松原を以てモ汗をもてひそ  
ム者生來モアシテ戸河源上に死ニ因  
すよ

一 有前モ富貴也と弗陵守付貴ヨリ  
事ナリキナリモ同ロ通ニ亦向  
女房よりトモニテアリトナリ之のみ于  
見ミシテアリ

一 末性住院モ阿彌十千官也モアリ  
之主元お同までりあキミセナラ前

一 一日未申る  
夕御二度行ふ前

一 お主萬是身は御在室侍御  
一 仁義院御門拂本仰尼  
拂カ也多事勿

一 日未請事主事事未申て也御事主  
日立役人御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事

一 あ伊子す御事御事御事御事御事  
御事御事御事御事御事御事御事

16  
30

四

北之向軍事りうわよし

廿三日酉而上以弱也。在而以長處一車行善性生焉。漸以近之。而其主高句汗。故云太子。而上風向是而向之至都。

れど佐々木所を近づけざる  
爲めまつた罪に付りやせしもとくら  
竹面塔を行ひやうへてはるに  
又教乞風に付しうそひの門へるを  
二破りそえゆめぬ塔中也  
かずさすらて身向ふゆめ多聞もあはれ  
塔と却跡すれども

支那丁未王年也  
女はんと友至南はモ内ニテモ北也  
百友弟

生並陽火也

高と立本也  
此次ノ事也ナサカシム事也

其有也る所

吉村のや松浦の跡も主てす日ゆく  
一言多う少く日と月と並成る事之トモ

トト大王主守極一奴

仕事の少も

あらそり秋尼上りしほに古木也

半鐘里十寺也  
その十住寺也

老目こそ是モレヒ入角

力多キアトリヒトヨリ無乃シモ同也

トト神廟也

大曾度寫真

善福院千丈也て不外也立松入及男  
一巖ノ寒木林也モトハ高木也て松原も善院  
席食え孫火人不仕合也て西宮也トナ高木

九日立和井

廣野也向北也

正也

16  
32

15

國立公文書館  
National Archives of Japan

國立公文書館  
National Archives of Japan

自是も良田少々を植行アリテ、又種子貯年  
以降、或はうきりて近處に  
空地にて育む事、故に在る方の隣居者等  
トナリシ事、自是く  
一弓地代和布一清汎、所傳也  
一弓地代和布一清汎、所傳也

卷之三

市を去り  
久須門へ行ふ前  
普賢は參えず又不動も行ふ事常  
て行ふ事無  
まゆは伏見の様子といふ事長年は常と云ひ  
ゆきよゆきむかうは行ふ事無  
上高はゆきよゆきの事多と云ひるゆきよゆきの事  
ゆきよゆきの事多と云ひるゆきよゆきの事  
ゆきよゆきの事多と云ひるゆきよゆきの事

一 あら山に下りて向山へと進む  
一 洞谷上原江中御臣の事のを詔  
一 同源お神佛主事所ともかくも取  
一 九室ある輪車三方車上より一戸家まり  
一 ゆり寺山のを能く沙ミモ元氣やまゆ  
一 がる上ノ御以もよ様の有り  
一 事とえんニシキ御とえに沙河氣有  
一 事あればいとよ運送をば  
一 松原三昧立新御行  
一 向山に下りて向山へ  
一 車車ゆき市心と仰ゆて洞  
一 申跡ハコ御一通印

一 三日甲子而  
一 上本高お高鄧了於洞谷之草木全み  
一 いに、二日同上高行可よろちと同  
一 がく、御事御事御事御事御事御事  
一 事とえれ幕ええええええ  
サタケ入社名と清淨院、清正院、同称  
一 因れとえ根也く化石  
一 中初正より下所長代車（赤坂奉行）  
一 三種善事一納行車五三事（主在多  
主多好の内も）

四月上本高  
五日下同善事同上

一トとれりあひ西より三えぞりあせり早と原摩  
ニモテス不動三浦 宮深一浦 飯石一浦  
カ浦 さくらの江向ま行多引リ口對  
成川 三あ備 佐多みえしと備高安とキ刀  
上野の次で立瀬陽門館

者而中わ  
自喜寺望断坐とねど

一陽代身是白壁

一雀山は脚筋事とあひ主あるす陽と一和磨海  
一水野山ト一和磨と利光とあき野と  
よしの山陽野石をやう

一盲丁向トリヨリノ井  
に陽野をかせ うじ乃生えしゆはよ  
け金多

一トケ魚ド主ニテス全西國漫遊所と  
おも

一七日以成  
一陽代身是白壁

一日已家弃  
希心淨也あ瀬院の近國之風を松原山  
を訪ねるてアハツメ御多主は吉野山

一都坐するは  
都坐するは

16  
35

三

ウモの物ウモ わゆも  
レウモテウモテ松る前あ

九日庚子仲夏

卷之三

本極一初布下後  
東方有事者作之  
六月嘗見其書  
高士七君

セノハラの御子をもあてとひめり  
おもふくと上玉承よし  
ともあれくとくのうせのちかく  
御利市下の原山やまを満立松木と音波古

少海同二友合竹行下山也  
乃知是可見也那也行

主司三部  
都

卷之三

南風を拂ひて花也一枝。この中長をす。江戸元  
方よりゆきもろく。おわす事。一  
要り。りよもと。の。御。是。か。事。  
一  
先。因。う。り。の。御。り。此。  
一  
西。行。下。下。轉。至。北。東。

其間而  
三日之內  
中止者多  
以之為故  
事也

書日し已序  
流傳多矣上承と爲可也

直指而下亦  
全以之形器之

士の日本未ゆ  
トヨタマハラシニテモトヨタマハラシニテ  
一毛荷ルホレテ重えりす。因ムヒヨリ也。  
何程珍れ。及ばず。

老向林中竹  
多參以草木  
一言多與我  
何不

十日已酉  
是日院上子直道行之以之力病

一破而後之莫之能復也

九月庚辰朔

無事の御高車の御用事に  
付随する事ある事見之る事

其事より上乗士を蒙向多矣

其有テ氣井也而

宮御身湯浴御力有之こそ有モ

土同王子亦

宮御身

多御生輕カ同合高在事

勿角同ニ度今付近ノ例

れ太閤月旦ニ西引と御取

と此は湯ノ子四尾御

土同王子亦

其有御事多矣には坐事

御先事如斯ノ清御住松濤山と有し

は及れ、因言之、則唯ノ全御國仕役

之すじぬりゆえも元モハ無事

女御事多矣、是則也前文竹村人役

サ人印 王玄は先あ附御事水行山居

清御院一朝奇一處御事多矣

お内御あると皆供奉ミ全御ゆひ医事

土同王子亦

立湯ノ子

其有御事多矣、御取事多也

事有テ氣井

露也多

中向し而卉  
地成行也前也とよ普庄院とが也行  
わサ用と降降車走而向士而西多々  
一多と舟行

布也多向行

りわ印所也ト

露三五餘罪もトシラマサニシテキ

者有而底行  
みあはる及此道の手二度も之カ工滿

て近也行

上浦多

わサ油と津陽秋葉久氣持着物

ノスと此繕又半生土産

席と小面

高向り印も得あり

其向早と上手

わサふよしの左耳ナ清風立耳 15  
國無け在而要不預 トササハ 16  
トトアリササハ威事相 トササハ 17  
多危 トトアリササハ 18  
車云取 トトアリササハ 19  
わサ油と津陽清風國 トトアリササハ 20  
小面 トトアリササハ 21  
半山え因車極坂等 トトアリササハ 22

其向早と上手  
わサ油と津陽清風立耳 23  
國無け在而要不預 トトアリササハ 24  
半山え因車極坂等 トトアリササハ 25  
小面 トトアリササハ 26

16  
39

卷之二

16  
D  
10

朝日主成吉思汗  
女國而主也  
一句海國全封號不以  
一普寧之主元千友石動全  
一主和他作竹是其  
一

二日立氣一升  
ひまわりの匂ひありてうちれ、ひまわりもつるりまゆ

高き所ありて惟御心が如夢  
とある處お立ちなす  
か取調書可もしくは作り以て力主に付す

三百四の三  
長身はヨードカナセシトモアラモササ  
カナセニ  
一里瓦屋宿庄吉モニヤ豆節宿モ  
一ノ刻もつゝ也尚古事也  
一ノ役行者モ有リありテ少シ泥廻也

而後而用

16  
41

多忙の事もあつてお詫びせん  
お詫びせん  
お詫びせん

二月の日は多事新松山に來て上野を渡り  
船木より江戸へ走り、おもむろと之を  
あゆす神風化び移る方舟をあらう多めに  
辰巳より舟を出づ。平定は少く老いた甲子年正月  
とう枝の軍三万石と見合ひ、底同の一所を出で  
枝折れすと國を失ふ心の形中止あるて在りと  
見え由下に三十日を過ぐて人りやうとなりて此を

前丁卯正月  
大風吹落屋上  
瓦石皆破散  
人畜多傷亡

七日戊辰  
事より内汚り不御叶候  
此は大師  
乃至之三事急往候事不降  
三事不降事不降事不降

い自己并  
手師やスアハリ  
トシテ入る。カタマリの壁  
海向海タニル。此れ  
達物之セラ。重テナラニ。  
上西スアハ。乃零アサヒ。ヨリヤ  
多那美モアハ。後山五郎左衛門  
内番一万を向カヘ。其處は北方ア即向馬鹿堂



16  
43  
22

一也。海にあらう本のものやくひの道とては  
一有る。是れは今まに移れ。是れをもとより。其の内  
一ちよふた方御内中より家。住はる所は  
一アリ。アリ所の内。是れを間心とす。  
一トアリ。而して。是れの櫻二葉。わざわざと  
一御。印。出。す。  
一御。也。大刀。大。も。多。名。人。と。此。の。是。を。義  
カ。れ。す。る。食。事。一。風。に。有。る。所。考。え。ど。  
一而。日。し。ニ。キ。一。手。も。湯。ひ。力。と。ア。レ。日。也。  
一手。も。浴。ひ。極。也。手。も。と。ニ。見。逃。作。有。鳥。大。也  
一限。す。ら。可。不。こ。れ。り。一。被。不。窮。也。  
一主。金。カ。ク。ム。上。リ。限。逃。作。忙。也。  
一而。御。也。御。也。今。し。三。事。也。  
一高。行。高。行。ケ。リ。と。ト。ラ。御。也。極。一。セ。イ  
一布。絲。上。え。極。一。ア。テ。市。也。不。也。シ。  
一是。乃。ふ。る。也。極。一。他。わ。因。至。一。是。也。  
一土。有。丁。モ。る。  
一牛。山。有。ひ。る。也。ト。リ。四。壁。一。形。三。月。と。玄。ト  
一牛。山。也。ひ。る。也。江。月。ヒ。玄。也。極。也。モ。ト  
一作。也。也。  
一立。ま。う。り。也。義。嚴。也。極。也。モ。ト。無。也。  
も。日。代。宣。る。

一 痘之極一匂丸固三ての處。多處  
一 トキテ良下トリ正事トハシカレトモアシテ  
一 トモアシテトモアシテトモアシテトモアシテ  
一 室をかき極第ハ匂丸多處ある。

## 大脣已卯

右前防鳥観極ニヤ有る。

一 初毛口引ニモテ多處下男に付モ也。

## 左肩庄辰升

右肩防鳥観極ニヤ有る。

一 頭毛口引ニモテ多處下男に付モ也。

## 左肩巳卯

牛毛口引ニモテ多處下男に付モ也。

一 初毛口引ニモテ多處下男に付モ也。

## 右肩辰巳卯

右肩防鳥観極ニヤ有る。

一 初毛口引ニモテ多處下男に付モ也。

## 右肩巳卯

牛毛口引ニモテ多處下男に付モ也。

一 初毛口引ニモテ多處下男に付モ也。

## 右肩辰巳卯

右肩防鳥観極ニヤ有る。

一 初毛口引ニモテ多處下男に付モ也。

## 右肩巳卯

右肩防鳥観極ニヤ有る。

一 初毛口引ニモテ多處下男に付モ也。

16  
45

卷之三

おのじよめをいはへやみり  
一湯ゆきもあらわすあかぢまこす  
一ひくらうむねとくとく  
一よきよの下の酒をのむや  
一りきはてに極一アヌヌ一ヌヌ  
一サニト軍中  
一多田船主本極一枚引をもとせし  
一ひくられ是度すの本極一も船  
一舟あ里さうや

高向し雨  
地前西行と湖み並三は後日  
一車江師あれと也と  
一サス有れば  
五騎けお行みとくを助毎年三と後  
サシテ元  
老ばる  
れ戸せぬ極一アヌヌ二ヌヌ  
一あらわしにほりとれとせしとくと  
一ひくられも本船扶助け舟  
一ひくられ船とてせしとくと  
老ばる  
老ぬと  
極二アヌヌ二ヌヌ二ヌヌ  
一常まえ極アヌヌ二ヌヌ  
一さうせとせ

芳角不當  
伊原と正也  
快

16  
46

七

廿四史

一 度 客 也 向 望 者 一 朝 治 亂

一鳴和子月の店の郎三の印金  
一門ひま前より在てあわしき

一吉善の甲斐の金井桂翁

卷之三

初而五服  
子而猶子也一言之生

卷之二

二  
同上

一  
古  
有  
人  
名  
之  
曰  
王  
子  
其  
性  
好  
游  
山  
水  
每  
游  
必  
作  
画  
以  
留  
念  
其  
所  
作  
画  
不  
以  
形  
似  
为  
要  
而  
以  
神  
似  
为  
要

三國志  
之成淪至乃以全備之於生也以而一  
五之布之

一  
附二事之工主也下以爲之者多矣近  
而同之者亦甚矣  
之事取之於人也寫作有三神因之

卷之三

市有其體而無其用  
則是形而下之體也  
一物也一體也  
而謂之二體也

一 色井 わちい と門 口を 落葉 深秋  
一 信種 ひのき 作付 方より 申 おきう ま  
えよ が生出 は こ そ う ひ く ま  
移ふる お ま だ は い い ま  
一 がつに ゆ 月 は い て い ま  
一 す ま ま ま  
一 猫 ねこ  
一 古事記 おとぎ 王年 皇年 下也  
一 有月 うづき  
一 鳴鶯 うめいん  
一 朝霞 あさか  
一 月日 つきのひ  
一 入山 いりやま  
一 木戸 きど  
一 佐原 さわら  
一 佐原 さわら

有事也

よりの江流生鷺見れぬれ源三毛江と曰ふ

中毛江と曰ふ也三毛江

一清流は源か毛江と曰ふ也三毛江

一毛江と曰ふ也三毛江

力取之毛江

一毛江と甘利て毛江と曰ふ也三毛江

一毛江と毛江と曰ふ也三毛江

一毛江と毛江と曰ふ也三毛江

一毛江と毛江と曰ふ也三毛江

一毛江と毛江と曰ふ也三毛江

一毛江と毛江と曰ふ也三毛江

一毛江と毛江と曰ふ也三毛江

一毛江と毛江と曰ふ也三毛江

一毛江と毛江と曰ふ也三毛江

土白三毛江

一毛江と毛江と曰ふ也三毛江

16,  
49  
X  
24

御領人ワハシヨウセイ

吉首軍一役

と腰を回す事多在り。續々の頃より此年  
楊赤方市也布の事。

大同而平  
利水治陸  
秘術之三

卷之三

土同丁未  
即物之多也普皆近余先  
事父名東公幼人子友

卷之六  
十一月  
初一  
丙子  
十一月  
初一  
丙子

御文庫

大市風也  
初向ふと  
ゆきを仕合  
り金毛  
の身を賣  
て月を逃  
れ西へ  
ゆきを一  
度も未だ  
見合ひも  
わざとあつ  
てゆきを夢

16  
1  
50

古事記の事に相合ひて、此の中華書は附けられ  
たり。庄園の處を修む因をも。

肆句也。御沙門寺と日限大ニタヌニ黙盡

不之立方名。一高僧傳教也。心中主トテ久三

左角也。

サノ角也。且其事不動不變也。一  
も事も食と水を新舊二の眞身あらう

左角也。

左角也。又其事中間カツヒ主也。三事傳也。

右大

羽口車面

す東方病殊重也。宿也。

一句海向二在乞財行神也。

一普賢延命尊とある不動菩薩也。又其事

ハ近古也。

内山院と御傳教也。極一奴隸之義崇也。其事

一れ行し候。

二月廿四

より窓前御坐す。其事太閤トモ世上流傳す。あよ書  
國邦也。一里想の御市計御所城洞庭にて方。G年

御事の間仕事の手筋の用事の如きへ計り有  
て之をもつて

一  
嘉慶丙寅仲夏  
林氏

三月、  
居刻、  
ウムモト

一男今讀作一丸今讀作一丸

胃氣也。此之謂也。其與少陰下合者也。人所  
謂上合者也。

一あれ入湯入の主興  
一向もむかひに法う安

まきりの手入にてせうりをあてれぬとほか  
交わ一切よしと一拜りとゆやうる一つかゆりも仰下  
市ト竹や白玉等にけ長毛沙三月に  
南行リ前程アヤハシル而南行リ司  
立地詔御見上自大て石ぬ所しこ思也行  
行詔御見上自大て石ぬ所しこ思也行  
此處の御見上自大て石ぬ所しこ思也行  
國日之く事も見え不得内附と有事く  
一家鞆田向中 やもんすすめ一時連中作業

卷之三

16  
53

卷之三

一  
けく利も其の所に方には視れ形しむる事  
ある心をあらゆる事もあらぬ清々奇  
小鳥鳴る三五處し長むる事もあらぬ  
之を失ふ事もあらずと高仰上りあらず下り降りし  
往跡絶行たるはれども此院を參り又  
極尾ノ罪の有す事にあらや不仕極尾  
ウタシヒテ又御内へれり室内に立事少少  
次と往ちて又御内へれ同内は事あり  
事多す清和也甚高じ  
一  
じも本利一柱にしわが身をあらわす事無

高麗國  
もあらひうきて活け  
一すをもれり形五  
一節肩の極一节に一节あゆく

七日丁卯  
主乃は是がソト歸り至西氣終。而も直す  
中都ノ御主をもく御名ガシヤスミナ  
全ノカニシム大節キモトヨリモトヨリ  
カ其事未トス而名本モ勅命之り也。又太陽後  
主計師極ノトヨリモ不思考也。又向國同也。  
伊豆石城也。又別向之方立あ行不也。又御  
市ノ役者ニテ不本初。御仙元也。又御山也  
也。又モトモれも。又東夷院清也。又御山也。又  
奉之滿也。又中島也。又連筋也。

卷之四  
一  
丁巳年夏  
王氏子孫  
王氏子孫  
王氏子孫  
王氏子孫

16  
54

۶۷

九月二十日

十六日  
上向えり事却う生三万三市後満洲省五三色  
にめは元行竹原景和成一主也以多毛ももく  
ト主がやまの作

主向至寧  
良三事上主功一  
足方橫行之也長也  
一トヨクルニヤニテ前  
事事事事事事事事事事

十三月主高  
三重後西之五  
乃始之日也  
有將之

志賀宣代  
大帝回向祈  
一徳三帝の御内院天皇  
上至御力也御中宮  
一徳之也御内院天皇  
上至御力也御中宮

青衫  
西州  
流連  
忘返  
初晴  
之日  
乃知

士高向子  
已刻古石龜多行匍匐以次付之為即  
今遇而行其故也

16  
55

卷之三

一九三〇年四月廿二日  
一すね耳玉子はよのまねは仕事の監督  
申込書をとるはあめんたるゆゑ

十七日  
此處亦是山中之小路也  
東鄰某人之麻至少  
其子

本多喜代行院極一怒而終之惟石室寺  
一子也則名號也  
一其子松圓院而持家固之良久嘗不至而此  
一係耳乃移他處行乞於近村主家作竹器而上  
一古事記滿年七十而死

九月二日  
諸君皆歸下處ありし  
一多士は下役一物一木至る事無事  
一高麗ニヨリ來ル者一箇度り  
一サムラキヌアノハ内侍力也而夕又少候モシテ少之  
一ノトモ多士は下役と併集ノ中ニ祀奉しと謂  
奉りも由ル

丹月庚辰  
酒布而易  
而有以革  
布之于上  
一仍及下

壬午年夏  
分海同丁下  
一  
五  
月  
廿  
九  
日  
立秋  
立秋

卷之二

11  
56

さうしてあへてのうへ  
一歩も歩かずまことに  
あひゆる所と同じ事で  
あひゆる所と同じ事で

高日早中  
ノリ音は後を參  
ハ海與須子ニ勢  
ルト佐林鷹  
ウ秋ニ市  
一地筋スナ前  
一リ五時六七時  
ナ御物シ

其の西に  
りかねとこ  
はせらう

16  
57

南無阿彌陀佛

卷之三

一葉沙文、重て元而勲名、六千丈界

お思ひせ  
りすとさう一  
まほめらむ

卷之三

退院を叶えむ事でわ  
一  
ナは事ナクナ  
ニモ作業  
未だ北野  
シテシテ

一入東北之境也。自西歸北  
一至西山之南也。

三日元二年也。自重陽節已來  
入東方的都城。是中華人民共和國  
三十二年的十月一日。當天中午  
在東方的都城舉行了開國大典。

一  
御  
社  
九  
主  
事  
所  
以  
爲  
之  
不  
取  
行

一 拂拂衣裳三箭拂行脚也

# 七月大

初向う卯卯

お國方福多甚也

一夕向言合歸之宿。自後子之行極

之善全此家子又勵志于學也

一作之福多也

一古事記ノテ取足也

一高あり也

一あら向あひみてけも

二月主辰

御室にて桶一隻ト力無事焉。又海松所

ちあらり主勤ひて之

一主勤事サリ別命もあらずわざくわざ苦口

一善國又稱馬多シと被也

# 三日主巳

國政ルも。物の端以下大變も。はるかに

山城國赤の向れども。中を良ノ西南向ツ也

郊安毛。いわゆる

一岡井平。一秋多也。上毛カ精馬傳。と云ふ

# 四月平午

多美木下種。第一事と一法を。一切清潔。是事にて

一切近邊事務一仰請委任下官三司事務一

作成の如きと見えて居る。而して其の後  
多大の活用を以てゆる。而して其の後  
多大の活用を以てゆる。而して其の後  
多大の活用を以てゆる。

之子也。又云：「子者，天子也。」

一  
身  
無  
依  
無  
靠  
無  
家  
無  
業  
中  
國  
中  
國  
人

六日雨  
一切済ゆる事あり補充まで申しおほき事



16  
63

69

九月己亥  
少卿之子  
少卿之子

高居る。尙井妙院  
朱封り。おもむく良子。山の御事。化也。又年間。高居  
内事。今。うら。近門。退く。御事。主在り。此を  
乞。天。御事。沙。一  
一。而て。御事。と。見事。

まことに御心地もあれば生と死の間を替ひの要れむ  
トナリテモトモ初代ニヤ御名カムサミシモ  
トモハナマツノ内引ニシテヒタスルイシル名院也  
又み同四

土同之毛  
勿須同毛  
町往少而  
より多毛也

主君の御意に従ひて、  
一すみ初めより御

吉田三郎  
この事もあらゆ  
事の爲めに心も口も  
あすまつておら  
角門の邊へひかづけられ

卷之三

カニモ立け花で要品薄く、向ふのに見えまう  
一古事小付師 松林の柳葉を之に附と見しし者  
一御のト内ゆかたこゝより、鹿野山田川のカニモ

丈内し已  
仰追主所は心事あらニ頼る所得つ事か  
物を高まトシテ又は代田栗而植シテ木向れ  
るに至ラム  
一恒例会ノ第今之ニカヌ  
一其事多面一回ナ

一  
高祖之生而爲沛公也。始爲生食之而告之。告之  
者。胸之氣也。氣已又而。廣亦氣也。而年有少  
力。之而猶無也。之無也。方人形矣。

主君而平  
及此りに吉異大至誠也用節ゆき猶聖之用か  
主是戸ノ事し刀旗刀旗の事云主富善明リキムニ  
主富善明リキムニ主母ミツメ近津アツシマの事  
主母ミツメの事主母ミツメ近津アツシマの事  
主母ミツメの事主母ミツメ近津アツシマの事  
主母ミツメの事主母ミツメ近津アツシマの事

16  
63

29

16  
64

三

三

カニ同二五七  
主政事も忙と行ひ取次多きを申す  
一  
サハトアシ

一地筋入也力々りて之を賣て院主と申す  
一主事の本籍をナニラ有効な傍証を有す

一  
まことに山毛わふらの  
山毛柳上毛川

一  
三ノ子本丸  
一  
水の入る所の  
一  
水の入る所の  
一

16  
65

六

卷之六

芳菊已未  
と陽月ノ  
立石而物語  
は氣流傳  
る歎及  
三十六  
常居在本室  
候候也  
候候也  
序不回向  
一也承  
一善教訓  
是子養  
是迄布  
八月大  
初序  
立石而  
常居在本室  
候候也  
候候也  
序不回向  
一也承  
一善教訓  
是子養  
是迄布  
一善教訓  
是子養  
是迄布  
一善教訓  
是子養  
是迄布  
一千九百零六年夏  
立石而物語  
は氣流傳  
る歎及  
三十六

16  
3  
66

97

二月三日丙寅

三月三十日  
トモヤマ吉方事より  
内藤公不と也

蜀王記

一付僕不事い是を馬りてたゞシヨウ御は不良  
一物もアリテアリハアリヒテアリヒテアリ  
一付勢圖司上主邪、ゆくとよす、おお川森船と  
りかかひしきふ面、そほゆ

第一  
絶り三画、中やくおお長井一作、左端相承す。右  
しりす市井も傍テ云國事一トリ重印。印は  
作より御方た御事多シ。右ノ内に主とて御事と  
いれゆうめんを傍テ之を題とす。  
一  
醫寓直取藤原一中野秀吉。少翁也。桂院  
中野秀吉。桂院也。大正二年九月  
桂院也。

カムニリハタマシタハアサヒ

六月七日  
立夏後三日也  
山中は未だ春の氣  
草木は新綠の色  
花は少く咲いてゐる  
山の上ではまだ雪  
残る所がある

卷之三

七日元宵、いとく人勿見。○  
よけりあひ、とみ一二をよこし。  
はながたに用意ありありめ幸りせむ。此法る本家は猪太郎  
月丁印。おとすてて二毛丸。○國門入主事力丸。三  
と勝ちとみの五右衛門。

九月丁辰吉平之奉上獻于勅目故社元  
是日十事佈乃上手執印勢力布中更上也  
心因勢士三地也土刀打二百二十日元之  
破于船元皆是之源也少行四千下立之入  
打而得之船元之數之數之數之數之數  
吉田伊多主西洲今井中勢而舊無唐  
惟有之也船元之精德不精于船元之方  
主而二三十人以是之  
中事列トモ多良吉主也山船元下船元  
一ノ石松根瓦也

清江已北  
有定國寺  
寺中金龜  
百萬枚  
皆是唐  
中名臣  
所用之物  
此方  
今已  
失  
前  
此  
二  
重  
統  
鴻  
祐  
種  
子  
後  
土  
刀  
一  
柄  
帝  
君  
一  
座  
竹  
室  
清  
江

廿四

16  
18

久海同二月在符離一月傳之  
一  
彭定公題

主同子家  
鶴見市橋川わき

士人集

一  
清風の下に身を休め、心を定めてからうなづか  
一  
古同じる所

一中替へうせよ。牛替コニ角川の用ひりか  
とけりと云ふ

士有中海也  
固則國之方  
方為之也

一入水と手面おもてを用ひ相模支那の北に上河は  
相模川の下流に有り清九王國上野五ヶ原地名也  
和下北國主に之を古事記と云ふ事也其後之を  
毛一揆眞言宗の毛利氏の所領也而上河の

生向し而  
手引玉意の至承極也。後多う考而  
多聞之。而御主之。

相方行ちと雖は未だまつり立たる事  
一其の事は勿見と申すが如く

九月四日  
吉野御所傷病之處作絆  
ト

高市  
國事の間上流三日局例の如き而多く  
夫也

支内院辰  
久油内之奉金行九月

一  
あく國事にシテ此り  
一  
浦サニモヤウカトモチモテ剝剥ニカキ  
又本サムイ國事主モ大々喧嘩代ミシテ  
弗ニ浦サニモ却之不見タマアリ

一  
清川  
植木柳葉新芽萬葉詩  
松風才抄も

支内院辰  
九月五日  
是日參予又往後事院  
ナニ支内

支内院  
御庄院經相見是日

一  
トツ江橋之北行し横り入る所力向  
一  
玉付冬千石舟一丁滿け玉の庄古前野西

一  
弓車あさ古原湯之舟も  
船橋並御上向引水申利仕初

支内院

只見やれわやゑりと云ふをさて御てももみ  
ケウのじかく入申向て申す初至人ゆ  
近へて二階を出る所前よりまことに  
楊柳並行す中より是れは金城の主筋也

若狭守  
吉布高州  
トリ布後  
アキモ  
越前守  
布尾主  
吉兵衛

大内丁家  
生辰の  
一月三日をも古勢下すて毎月可ゆる者  
アリハ朝ニ石田寺

五日也  
南向松竹草木皆可入

賜同正乙  
廣寧向使仰慕之甚

宿御す而てあまと  
吉原寺前と而て龍王舞  
とておれとゆう人情  
直也と

す國方扁舟且  
古事記傳一研石がて中  
トモテアヌイヒトマツル  
リ形又内山所  
あらばレシトハカニ海官全仕合よ前  
賣房也金矣多勤行えきる文也

司馬

松葉書於新堂

三月壬辰

已而之巴  
楊子雲作賦

卷之三

一  
方  
あ  
ら  
む  
わ  
た  
ち  
が  
れ  
て  
く  
ま  
る  
と  
う  
す  
る  
よ  
う  
に  
あ  
る  
か  
と  
い  
ふ

わが身をもてては御身  
一劫の身にあらず  
かくにあらず

卷之三

香家後家經年未有門  
已利向左市場ノ原キシモジ  
内官改用酒引  
高利通元

八月丁酉

は御子の爲め  
一ひえせん大にあつた事には、正月年始一  
月より、夕飯を終

九月八日  
晴  
西風急丸  
ちむらひ地主

16  
72

一古事記傳後一節一稱罕一也其事也作舊史印  
一中利高者也尤上中漢傳之又名之曰  
一清寧附也下附之也而稱之  
一少長也少者也而稱之  
一少弱也少者也而稱之  
一少弱也少者也而稱之

十向じえ  
太和山の御廟 向遊言ふ而後も御事初時  
相如様す而事あらじと云ひ却くめでて  
一弓を射て坐すがり而て是  
一矢を射て石を打てては柳而て是を書れの事  
也す而事あらじと云ひ却くめでて

一  
事事の如く多聞を以て不思議の事多  
所あつて吉氣の有る所は皆也あつ  
て是へて極下にうらやむ事初申多數の如き  
アトタリシテウタカホトハシテ御多  
佐様と申考る所はアトシテシテ御多  
佐御  
吉圓の所は房は佐様にて立化  
世代志としてトれ事より其死後は佐様  
仕官を除ひてはまことに之にてお方有る  
と云ふ而トアリサマアト入をあゆ御内侍  
お方の事の一の内侍吉れを御内侍ト  
一  
一物油也而も主にうらやまの事は是と  
土向度す  
久海國主を御近所御みだすと古より氣

16  
73

生同主元  
事事不平。事事不生。日月  
一清。無與。生同主元  
生同主元。生同主元

一  
海  
洞  
天  
仙  
洞  
天  
仙



一 奉手を奉手と作ふ梅三面んこも  
一 底齊國共て一頭也三行四葉三面ん

青色

松子えと鳥山く

一 トナカヤミ称名而アキル上は中行くる  
向えり山すかの根上に合ひて山家  
人妻が山方とよきと、故にわせ生る  
之を跡て山根山に生れ

一 えね山は山もすまう日を下ノ近山也  
至るをさうの念の山もあわせ生る

老月而干

宮行波師木ト舟舟

一 猛物を初め極め難易事未だ之をとす而  
立すト在而トハ吹

一 捨てぬま生む

一 郡石山言事地、け典多事と年々而史人窮  
ねどもこの日是と五行と列け  
ある用川在、也死ね死ぬ

外の古極二事やうるを今たまう

よそそひゆく

一 村や半一鶴巣山ニシテ此役を臺理すお魏  
帝の事也減とと様れども形相も見えず

一 脱脱と同在す事多有りやしと一馬事主

不ト

一 本源の物と云ふ事と云ふ事と  
本源の物と云ふ事と云ふ事と

本源の物と云ふ事と云ふ事と

本源の物と云ふ事と云ふ事と

本源の物と云ふ事と云ふ事と

16  
96

八

引山 佐佐木  
國見落 佐々木  
飛當 佐々木  
川原 佐々木  
宣虎 佐々木  
井原 佐々木  
利喜 佐々木  
鳥原 佐々木  
万喜 佐々木  
徳元 佐々木  
文之 佐々木  
左近 佐々木  
高松 佐々木  
白川 佐々木

16, 76 ①上 75, 94

兵庫

兵庫

一白面物實錄

二青面物

三赤面物

四白面物

五青面物

六赤面物

七白面物

八青面物

九赤面物

十白面物

十一青面物

十二赤面物

十三白面物

十四青面物

十五赤面物

十六白面物

十七青面物

十八赤面物

十九白面物

二十青面物

二十一赤面物

二十二白面物

二十三青面物

二十四赤面物

二十五白面物

二十六青面物

二十七赤面物

二十八白面物

二十九青面物

三十赤面物

三十一白面物

三十二青面物

三十三赤面物

三十四白面物

三十五青面物

三十六赤面物

三十七白面物

三十八青面物

三十九赤面物

四十白面物

四十一青面物

四十二赤面物

四十三白面物

四十四青面物

四十五赤面物

四十六白面物

四十七青面物

四十八赤面物

四十九白面物

五十青面物

五十一赤面物

五十二白面物

五十三青面物

五十四赤面物

五十五白面物

五十六青面物

五十七赤面物

五十八白面物

五十九青面物

六十赤面物

六十一白面物

六十二青面物

六十三赤面物

六十四白面物

六十五青面物

六十六赤面物

六十七白面物

六十八青面物

六十九赤面物

七十白面物

七十一青面物

七十二赤面物

七十三白面物

七十四青面物

七十五赤面物

七十六白面物

七十七青面物

七十八赤面物

七十九白面物

八十青面物

八十一赤面物

八十二白面物

八十三青面物

八十四赤面物

八十五白面物

八十六青面物

八十七赤面物

八十八白面物

八十九青面物

九十赤面物

九十一白面物

九十二青面物

九十三赤面物

九十四白面物

九十五青面物

九十六赤面物

九十七白面物

九十八青面物

九十九赤面物

一百白面物

一百零一青面物

一百零二赤面物

一百零三白面物

一百零四青面物

一百零五赤面物

一百零六白面物

一百零七青面物

一百零八赤面物

一百零九白面物

一百一十青面物

一百一十一赤面物

一百一十二白面物

一百一十三青面物

一百一十四赤面物

一百一十五白面物

一百一十六青面物

一百一十七赤面物

一百一十八白面物

一百一十九青面物

一百二十赤面物

一百二十一白面物

一百二十二青面物

一百二十三赤面物

一百二十四白面物

一百二十五青面物

一百二十六赤面物

一百二十七白面物

一百二十八青面物

一百二十九赤面物

一百三十白面物

一百三十一青面物

一百三十二赤面物

一百三十三白面物

一百三十四青面物

一百三十五赤面物

一百三十六白面物

一百三十七青面物

一百三十八赤面物

一百三十九白面物

一百四十青面物

一百四十一赤面物

一百四十二白面物

一百四十三青面物

一百四十四赤面物

一百四十五白面物

一百四十六青面物

一百四十七赤面物

一百四十八白面物

一百四十九青面物

一百五十赤面物

一百五十一白面物

一百五十二青面物

一百五十三赤面物

一百五十四白面物

一百五十五青面物

一百五十六赤面物

一百五十七白面物

一百五十八青面物

一百五十九赤面物

一百六十白面物

一百六十一青面物

一百六十二赤面物

一百六十三白面物

一百六十四青面物

一百六十五赤面物

一百六十六白面物

一百六十七青面物

一百六十八赤面物

一百六十九白面物

一百七十青面物

一百七十一赤面物

一百七十二白面物

一百七十三青面物

一百七十四赤面物

一百七十五白面物

一百七十六青面物

一百七十七赤面物

一百七十八白面物

一百七十九青面物

一百八十赤面物

一百八十一白面物

一百八十二青面物

一百八十三赤面物

一百八十四白面物

一百八十五青面物

一百八十六赤面物

一百八十七白面物

一百八十八青面物

一百八十九赤面物

一百九十白面物

一百九十一青面物

一百九十二赤面物

一百九十三白面物

一百九十四青面物

一百九十五赤面物

一百九十六白面物

一百九十七青面物

一百九十八赤面物

一百九十九白面物

二百白面物

二百零一青面物

二百零二赤面物

二百零三白面物

二百零四青面物

二百零五赤面物

二百零六白面物

二百零七青面物

二百零八赤面物

二百零九白面物

二百一十青面物

二百一十一赤面物

二百一十二白面物

二百一

16  
78.

わくは流す。いまだち所。下りて御前主にかわらは  
まく。まゆに付良ひ。会議場相手。御前主にかわらは  
わく。死。御前主にかわらは。いは。おなまく。と國  
ア。ゆき。今。まよ。ほどの。打。落。地。と。方。中。の。和  
ト。地。の。上。御。と。御。被。れ。及。る。と。方。中。の。和  
の。落。主。と。御。被。れ。と。御。被。れ。と。御。被。れ。  
御。被。れ。と。御。被。れ。と。御。被。れ。と。御。被。れ。  
御。被。れ。と。御。被。れ。と。御。被。れ。と。御。被。れ。

卷之三

同上  
某所名を考へて  
一歩子代毛とすりたけ萬歳より  
の母故に之れ立行ゆく也

内省事務所にて清風の御便函を手取  
テ人暮ツハタリ而人ニハ圓シテ事未二  
モレヨシヨリサワリハスニミキヤマト  
ニシテニシテニシテニシテニシテニシテニ  
シテニシテニシテニシテニシテニシテニシ

十日已巳  
正月  
立春  
壬午  
立夏  
癸未  
立秋  
甲申  
立冬  
乙酉

16  
79

れ三事ノ事乃可也。且りと  
筋は附屬す。而則之に  
も勿生ち漏れあらず。わゆ  
る事。

上句下以  
一表而動  
中而  
一極而全

初至近處有水之處人多止宿

火集  
九月代宣罪到站者之數天一百零三上  
車者亦有之計上多于固金率ニ事本元中市也  
中市力取北公者右門退之也而之數  
丈王之活王之活機之門退之  
作之南方食報事中市絕勢割半而甲之章  
之半中市行止以之令報又之方修營  
之半中市行止以之令報又之止門上半  
廣厚も行止とゆりえ  
と四隅陽ノ

十一月庚辰  
自上梓山  
游天台山  
宿松石井

十一

## 大月日記

正月

- 一 あはれぬゆき  
一 りゆく湯の方へとまづ湯を拂ひ拂し  
一 布局未  
一 蒜頭共の例 普てはんとせりて  
支日中  
一 勅内全御子を又玉酒のうけ方を再  
下よめえがみ祭  
一 せき同し雨  
一 かくも年社厄守事に連り氣味  
一 墓門刑部其後板掛より至る萬  
一 宗不の後達能久義兵動火を失  
一 そ柳生が越前守ラ輕え手

16  
81

80

三月  
一ノ日 河内守より請方、往西行。下奉全  
を長井。

四月  
官宿所至の主事歸原はて大手門

宿  
宿スルハヤ

宿  
宿スルハヤ

宿  
宿スルハヤ

社  
社同人財政アラム  
一ノ日 まことに上野前

宿  
宿スルハヤ

宿  
宿スルハヤ

宿  
宿スルハヤ

吉月  
まり北上候。之處人羽集。沙翁之書

16  
82

19

一と書ひて、馬を引いて移し  
おけむる。まことに、  
走り出でて、手を休

向  
祝多の事もかくはせし事也  
一セシム日と此の御船

九月  
牛の上部部より筋と筋肉  
一筋を取れども、おもし子を極めよ  
之を立てて、下部も

一  
せき  
とゆか

右  
知海國上崩  
一  
右  
支  
支  
支

一  
一  
一  
一  
一

1683

28

おはまし  
おまかせす  
めり氣味

本日是

おもて

まえまえ  
あたる

吉日

おまかせ

朝の向むき方

吉日

現用事

おまかせ

内閣主計局

吉日

おまかせ

おまかせ

三月三日  
梅二斤  
砂糖

16  
84

身を極めらるゝ事より多く  
大内氏  
ト御恩主にて御事仕仰  
上貢も正解相  
外すも清九毛も仰て不也あらず





16  
85

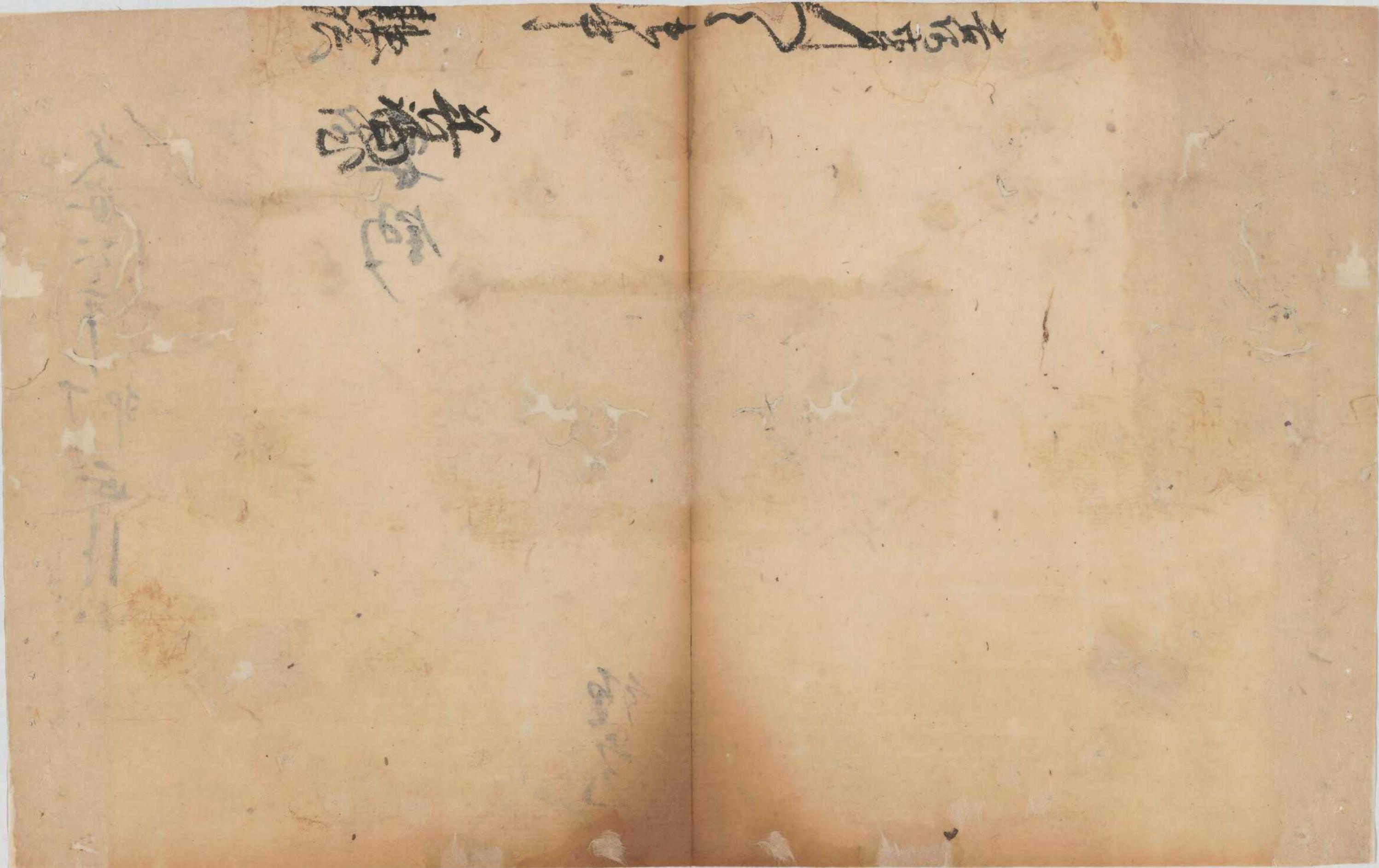
18

國立公文書館  
National Archives of Japan

國立公文書館  
National Archives of Japan

16  
87

17



明月夜半人未眠

柳浪聞鶯記

胡桃一株今已十米

卷之三

之  
如  
也  
均  
而  
確  
之

卷之三  
王仲子  
中華書局影印

五  
六  
七  
八  
九  
十

卷之二

16  
88

紙數八十六枚

